



Hitomi 様

愛用ミシン: JC550


母の背中

小さい頃の私はミシンを踏む母の傍で、見様見真似でお人形に布を巻き付け、洋服を作っては1人遊びをしているような子供だった。成長して服飾とは無縁の事務仕事につき、趣味で編み物は続けていたものの、大人になってからはミシンとは無縁の生活をしていた。

やがて結婚し、子供に恵まれ、毎日が慌ただしく過ぎていくなか、思い出すのは自分が小さかった時の母の姿。いつもミシンが傍にあった日々。

息子が小学校入学を迎えることになった頃、一念発起してミシンを買った。高級でもなく、普通の家庭用ミシン。初めて作ったものは息子の通学バッグや体操服入れなど、いわゆる入学グッズ一式。ネットや本を見て作り方を学び、息子が選んだ生地を買い、縫ったり解いたりしながら。一生懸命になりすぎて、夜遅く縫っているとミシンの音が気になって眠れないと言われてたり、ご飯の支度が遅くなっていつまで縫うと言われてたり。それでもやっと形になり、初登校の日一緒に荷物を入れた時の事は今でも思い出せる。

高学年になれば既製品のかっこいい方がいい、と言うかもしれない。途中で破れて買い直さなきゃいけないかもしれない、そう思っていたが思いがけず大事に使ってくれたようで、卒業まで毎日使い、洗濯をし、中学生になっても塾に行く時の習い事バックとして活躍してくれた。仕事で忙しい時、喧嘩して生意気なことを言ったり、すれ違うこともあったけれど、自分が作ったものをこんなにも毎日使ってくれた事に今は感謝の気持ちでいっぱいだ。



職場が変わり、少し自分の好きな事をできる時間が取れるようになった今は、またミシンを持ち出して、自分や家族の服を縫っている。今度は何？と言われながらも試作品ができたなら何も言わずに着てみる息子。今更ながら、あの頃の母の気持ちに少し思いを馳せ、なんだか誇らしげな、暖かい気持ちになる日々を今日もミシンと共に過ごしている。